

## 「すべての国の人の祈りの家」 マルコによる福音書 11章 15～19節

今日の聖書のお話は有名なイエスさまによる宮清めの話です。イエスさまが都エルサレムに入城された1日目に、エルサレム神殿の中に入り、神殿の様子を詳しく見て回られました。次の日、イエスさまはエルサレム神殿の現状を嘆き、怒り、この現状を変えるために行動を起こされたのです。イエスさまはエルサレム神殿の一番外側にある異邦人の庭で、商売をしていた人たちのテーブルやイスを壊れるほどにひっくり返し、暴れまわられました。イエスさまが暴力的とも思える行為をされたのは、聖書で唯一この箇所だけです。

でもイエスさまはカーッとなり、突然切れたのではないのです。前日にゆっくりと下見をし、今のエルサレム神殿がどうなっているのか、よく見極めたうえで、神殿の境内で商売をしていた人たちのテーブルやイスをひっくり返し、そこから追い出すという行動をとられたのです。今日の聖書のポイントは、イエスさまがエルサレム神殿をじっくり見て、どこに怒りを持たれたのか、何を批判しておられるのかという点です。その点を中心に今日の聖書の御言葉を聞いて学びましょう。

エルサレム神殿は紀元前950年頃、ソロモン王によって建てられました。立派な石や高級なレバノン杉を使い、美しい装飾が施された壮麗な神殿でした。しかしバビロニア帝国によって南王国ユダが滅ぼされた紀元前587年に、エルサレム神殿も無茶苦茶に破壊されました。50年たって、バビロン捕囚から解放された人々がエルサレムに帰って来て、エルサレム第二神殿を建てました。そこからさらに500年たって、ヘロデ大王がエルサレム神殿を大幅に増改築しました。白い大理石でつくられた神殿の建物の正面を黄金で装飾し、太陽の光が当たって光り輝くようにしました。いなかのガリラヤ地方から出てきたイエスの弟子たちがこのエルサレム神殿を見たとき、あまりの壮麗さに「イエスさま、なんてすごい神殿なんでしょう」と驚いたという話が聖書に残っています。ヘロデ大王が改築したエルサレム神殿はそれほどすごい神殿だったのです。しかしイエスさまはエルサレム神殿の外側の美しさに心を奪われてはならない。大事なのはその内側、中身なのだとされるのです。

エルサレム神殿の建物のまわりは祭司の庭で、そこは祭司とレビ人しか入れませんでした。その祭司の庭で、イスラエルの民がささげた犠牲の動物を焼いて、神さまにささげ、礼拝をしていました。もともと遊牧民族だったイスラエルの民は大切な家畜を神さまにささげて礼拝していたのです。祭司の庭の外側に、イスラエルの男子の庭がありました。イスラエルの男性はそこで祈りをささげました。さらにその外側にイスラエルの婦人の庭がありました。イスラエルの女性はそこで祈りをささげました。そして一番外側に長方形の形をした異邦人の庭がありました。ここは外国人でユダヤ教に改宗した人が祈りをささげる場所でした。ところがイエスさまの時代、この異邦人の庭は、商売人、犠牲の動物を売る露天商、神殿税の両替をする両替商などでいっぱい、まるでにぎやかな市場のようでした。外国人の人たちが神さまに静かに祈りをささげる場所とは程遠い状況でした。

昔はイスラエルの人たちは自分の持っている家畜を連れて来て、それをエルサレム神殿でささげていました。しかしエルサレム神殿で祭司がささげる動物の適性検査をするようになり、せっかく家畜を連れて来ても、その検査に合格しないと神さまにささげることができませんでした。そこで祭司のリーダーたちは、異邦人の庭で、検査に合格した犠牲用の動物を売って商売することを許し、そこからお金を受け取ってもうけていたのです。ユダヤ人の成年男子は年に1度、神殿税を払わなければなりません。その時、ギリシャやローマの通貨ではなく、ユダヤの通貨シェケルに代えて、神殿に納めなければなりません。それで両替商が手数料をとり商売していたのです。まさに神殿産業です。そこで得た利益、莫大な収入は神殿を維持するためにも使われましたが、祭司のリーダーたちの利益になり、祭司のリーダーたちは大きな屋敷に住み、贅沢三昧の生活をしていました。当時、何万人もの祭司がいたと言われているので、おそらく甘い汁を吸っていたのは、祭司のリーダーたちだけだったと思います。生きて働かれる神ヤハウエを礼拝するために聖別された神殿が墮落し、神殿の建物、外側がいかにか立派でも、その中身が腐っていることに、イエスさまは激しい怒りと嘆きを覚え、神殿から商売人を追い出す行動をとられたのです。

イエスさまはこの時、旧約聖書の預言者たちの言葉を引用して言われました。17 節の言葉です。これはイザヤ書 56 章 7 節にある預言者イザヤの言葉です。「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」です。最初に神の民に選ばれたイスラエルの民だけでなく、外国人であってもエルサレム神殿で神さまを礼拝することを神さまは許し、喜んで受け入れると神さまが約束してくださった言葉です。本来、エルサレム神殿の異邦人の庭は、外国人の人たちが神さまに祈り、神さまの臨在にふれるための大切な場所でした。ところが騒がしい市場のようになっていて、外国人の人たちが神さまを礼拝するのを妨害していました。二つ目は預言者エレミヤの言葉「ところがあなたたちは、それを強盗の巣にしてしまった」です。(エレミヤ書 7 章 11 節)エルサレム神殿で形の上では敬虔に礼拝をささげていながら、実際は自分の欲望のままに生きている。礼拝をしていても全く悔い改めて、神さまに立ち帰ろうとしない。そういうことを続けていたら、イスラエルの民もエルサレム神殿も滅びることになるとイエスさまは警告しておられるのです。

結局、イエスさまが問題にしておられるのは、建物ではなく、その内側なのです。イエスさまが願っておられるのは、エルサレム神殿が本来の姿に戻ることに、世界中の誰でも、神さまを礼拝し、祈ることができるようにすることです。キリスト教会も同じです。いくら立派な建物を持っていたとしても、大事なの中身です。キリスト教会にとって、一番大事なことは礼拝をすることです。しかし形式的に礼拝を守っていたらそれでいいというではありません。礼拝に参加した私たちが神さまの臨在に触れ、神の言葉を聞き、神を賛美し、悔い改めて導かれる礼拝になっているかです。

「先週も一週間、いろいろ自分勝手な生き方をしてきたけれども、これではだめだなあ、もう一度、神さまに立ち帰り、神さまを信頼し、神さまに少しでも喜ばれるように生きよう」と思って、礼拝から私たちが新しく出発できるように、そういうふうに私たちは礼拝をしていきましょう。